

消費社会と社会的性格の変容

富田英典・原 清治・富田和広

はじめに

初期の消費社会における社会的性格をD・リースマンは的確に描き出しているが、そこには一九五〇年代のアメリカという制約があり、彼の提起した他人指向という社会的性格がそのまま今日の高度消費社会に当てはまるとは言い難い。本稿は、ボードリヤール、ラッシュュ、トムソン、リースマンらの所論から、消費社会の高度化と社会的性格の変容について考察し、その例証として我々が実施した中学生調査と一九八八年から八九年にかけて発生した「連続幼女誘拐殺人事件」について取り上げるものである。

一 消費社会の変容とナルシズム

①ボードリヤールの消費社会論

まず、消費社会論について精力的に研究を進めているJ・ボードリヤールの見解について検討しておきたい。ボードリヤールは、消費される物を「機能的体系または客観的言説」「非機能的体系または主観的言説」「メタ機能Ⅱ非機能的体系」に分類している。「機能的体系または客観的言説」に属する物は、伝統的な有機的結合から解放されたユニット家具に代表される固有の価値を失った機能的な物である。「非機能的な体系または主観的言説」に属する物は、收拾家によって集められた数物やテーブルなどのように、機能によって規定されなくなり、所有とかたちで主観的に規定されたシリーズの中の関係項となった物である。第三の「メタ機能Ⅱ非機能的体系」に属する物は、皿に触らないでも汚れを落とせる超音波皿洗い機や九段階で焼けるトースターなどの自動化された物、ガジェットのように全く役に立たない機能を持つ

た物であり、超機能的な物である。自動性は機械の完成度と比例し、物が自動的になればその機能は完成されるがそれで終わりである。自動機械（ロボット）はもはや物を越えた物であり、ガジェットに至っては機能がひとつの口実でしかなくなっている。このポードリヤールの三類型に従って、消費社会の変容を「機能的段階」「非機能的段階」「メタ機能Ⅱ非機能的段階」に分けるとするならば、今日のアメリカの消費社会は第三の段階に突入しており、ガジェットやキッチュが商品として登場してくる一九八〇年代の日本の消費社会も同じ段階にあると考えられる。生産力の向上、大量生産、大量消費に支えられた産業構造は、一方で労働場面における疎外感を増大させ、それを解消する余暇と消費の重要性を高め、他方ではマス・メディアによる商品広告を通じて人々の購買欲をかき立てた。製品間の品質の均質化は、さらにセールス・ポイントを広告に登場するアイドルや商品名、パッケージのデザインの違いといった記号的差異に移行させていった。メタ機能Ⅱ非機能的段階」に突入した消費社会における商品の消費とは、記号の消費であり、差異の消費となる。

製品の品質・性能が一般的に向上してくると、企業は他社の類似商品との競合に勝つために、価格面での差ではなく、広告等によって付与される他社の製品とのほんの僅かの差、いわゆる「製品差 (product differentiation)」で勝負しようとする。リースマンは、一九五〇年当時、アメリカ人はパー

ソナリティについて同じように僅かな差をつけようとしていたと考えた。彼は、「製品差」と区別しさらに広い意味で適用するために「限界的特殊化 (marginal differentiation)」という用語を使用した^④。それに対して、ポードリヤールは、現代社会を生産の鏡ではなく、消費の鏡で写し出そうとした^⑤。生産されるモノではなく、消費されるモノを記号的にとらえようとした。彼は、消費社会の構造を分析する中で、「最小限界差異」という概念を提出しているが、これはリースマンの「限界的特殊化」という概念の延長線上に位置づけることができよう。「どんなに要求の多い女性でも、メルセデス・ベンツがあれば個人的な好みと欲望をきつと満足させられるにちがひありません!」「本当に自然なレシタルのヘア・カラーを使うようになってから、……略……今までよりずっと本当の私になったのです」。ポードリヤールは、ル・モンド紙と女性週刊紙に掲載されたこの広告を引用しながら、絶対的価値としての「個性」などは機能的な世界から放り出されてしまい、もはや存在しない個性が今また「個性化」されようとしているのだと言う。ポードリヤールは、最小限界差異によって生まれる「本当の自分」を夢みることを「個性化されたナルシズム」あるいは「管理されたナルシズム」と呼ぶ^⑥。それは、「自分で自分を個性化する」ことであり、「個性化する自分」と「個性化される自分」、つまり「本当の自分」と「本当の自分でない自分」の両方を一度に設定しなけ

ればならない「自己言及のパラドックス」そのものである。

② ラッシュユのナルシズム文化論

ナルシズムを消費社会との関連で正面から取り上げているものにC・ラッシュユの著作があげられよう^⑦。彼は、現代人は、ファンタスティックな商品の世界を生きていると言う。商品の価値は、実用性や耐久性ではなく市場性にあり、流行の変化や新製品の発表は、未使用の商品でもその価値をすり減らしてしまう。我々は、たんに物質に取り囲まれているだけでなく、ファンタジーに取り囲まれている。そこには、主体も実在もない。人々は、客体の世界を自己の延長、あるいは投影にしてしまう。自分の周囲を一種の乳房のように感じ、充足と欲求不満を繰り返し、自他未分化のまま自己の全能感を肥大させていく。

ラッシュユは、ナルシズムを「世界を一つの鏡として考える傾向、わけても自分自身の恐れや欲望の投影と考える傾向^⑧」と定義し、消費文化はナルシズムを助長すると主張する。現実の生活は、巨大な官僚制や複雑なテクノロジーによって成立している世界であり、人々は理解やコントロールを拒む世界に生きていると感じている。核戦争による滅亡の恐怖、天然資源の枯渇、エコロジー面からの警告などから生まれた「終末感」に、危険が迫っている、あるいは隣合わせであると誰もが感じている。しかし、この悩みもあまりに当り前の

ものになってしまい、今やこの危険から逃れることができるとは、誰も考えていない。そんな中で、現代人は、平等主義的家族の出現、家庭外での社会化をすすめる要因の増大、イリュージョンとリアリティーの境目を取り外してしまうファンタスティックな商品の世界などによって、ナルシズム的パーソナリティを助長されていくのだとラッシュユは考える。

ラッシュユは、ナルシスト的自己を「ミニマルセルフ」と呼んだ。無力感、ビクティマイゼーション感（犠牲者にされる感覚）が増大していくなかで、残された道は、サバイバル、それも精神的サバイバルでしかない。「感情の均衡を保つために必要なものはミニマルセルフ（最小限の自己）であり、過去の時代のインベリアルセルフ（尊大な自己）ではないのだ。」^⑨と云う。それは、「それ自身のイメージで世界をつくりなおしたい、自らの周囲にとけ込んで至福の一体化を遂げたいと望みながら、自らのアウトラインすらはつきりしなくなっている自己^⑩」である。ナルシスティックな現代人にとって、日常生活は危険に満ちている。そこで、ジョークや皮肉な態度によって、あらゆる場面で他者から「距離」をとろうとする。そして、自分の人生のイベントの数々を誰か他人の身の上を起こっているかのように自分自身を観察する方法、ロール・プレイング、「保護擬態」（その場の環境に合わせて保護色を変えること）、ユーモア、自分自身のパロディ化など、様々なサバイバル・ストラテジーがとられる。つまり、「無

限に順応でき、とりかえもきくアイデンティティ」が必要なのである。「確固たるアイデンティティ」は、順応性の限界の名残であり、「限界があること」は攻撃されやすい弱点があることなのである。

ラッシュのナルシズム文化は、サバイバル文化と言いつ替えることができる。他人のためでもなく、次の世代のためでもなく、ただ自分自身のためだけに生きること、自分だけ生き残ることしか考えない生き方が、現代のアメリカで大流行していると言っているのである。

そこで、次にこのような現代消費社会におけるナルシズムをリースマンの「他人指向」以降の社会的性格と位置づけ、他人指向からナルシズムへの変化について考察しているI・T・トムソンの見解¹⁾について取り上げたい。

二 トムソンの「変易的アイデンティティ (fluid identities)」と「役割の自己規定 (personal role definitions)」

① 他人指向からナルシズムへ

トムソンは、T・ウルフやC・ラッシュ²⁾といった社会批評家とR・H・ターナー³⁾やL・A・ブーチャー⁴⁾といった社会学者によって指摘される最近のアメリカ人の社会的性格の変化に注目する。社会批評家は、一九七〇年代のアップバー・ミドル・クラスの典型的なアメリカ人の社会的性格はナルシステ

ィックであると主張し、社会学者は、現代のアメリカ人は高度に柔軟なアイデンティティを持っていると主張している。しかし、トムソンは、この新しいアイデンティティを支える社会文化的基盤である「急速に変化する社会」「生産から消費への生活の重点の変化」「文化的対主義の感覚」などは、

他人指向の一九五〇年代にすでに存在していたと指摘する。社会批評家は、劇的な変化がわずか二〇年の間にいかにして起こったのかについて未解決のままであり、他方で社会学者は、一九七〇年代に何故新しいアイデンティティが出現したのかを説明していないと言う。

そこで、トムソンは、他人指向からナルシズムへという社会的性格の変化を「変易的アイデンティティ」と「役割の自己規定」の発展ととらえることによって、この二〇年間に何故新しい社会的性格が出現したのかを明らかにしようとする。トムソンの言う「変易的アイデンティティ」とは、常に開かれた選択と拘束されなにかかり合いの下で状況に応じて柔軟に変更できるアイデンティティを指し、「役割の自己規定」とは、自らの役割を外的な基準からではなく自分の判断で選択することを指している。

(一) 「変易的アイデンティティ」の出現

他人指向の人間は、「柔軟性」と「他者に対する感受性」によって、変化する社会の要求に応えた。しかし、他人指向に見られる対人関係の重視、自己と他者の両者に対する鋭敏

な感受性、進んで柔軟であろうとする意志などは、アメリカ人の性格の基礎を形成している態度であり、それはナルシズムにも見られるとトムソンは指摘する。他人指向的な人間は、柔軟性と他者に対する感受性によって、仲間集団の中でアイデンティティを安定させつつ、変化する社会の要求に応えようとした。しかし、彼らの中にはまだ「制度的自己」(「institutional self」)への執着があり、仲間集団の嗜好の変化に同調し続けることによって、自分のアイデンティティに対する不確かさを増大させていった。

ところが、一九七〇年代のナルシストは、「流動性を当然のことと感じ、もはや安定した自己を求めず、自由を永続的な内面的コントロールの欠如と規定する。」安定したアイデンティティは望ましくないと考え、他人指向的な人間が感じていたアイデンティティの不確かさをナルシストは当然のことと考えるようになっていくのである。その時の必要や傾向によって状況に 대응することが自由であると考えるのである。つまり、他人指向からナルシズムへの変化は、より変易的なアイデンティティへの移行を意味しているのである。

(二)「役割の自己規定」の出現

また、他人指向からナルシズムへの変化は、役割規定の変化を含んでいるとトムソンは考える。他人指向的な人間はそのつど仲間集団によって自分自身を再評価しなければならなかったが、ナルシストは外的な基準からの自由を宣言す

る。他人指向的な人間は、他者による評価を気かけ、人から好かれることを望んだが、ナルシストは、それは他者の意見や好みの犠牲になることだと考える。「他人指向の人間以上にナルシストは不変の社会的基準に自分自身を結び付けようとはしないが、制度的権威から手を引く過程は他人指向の時代にすでに始まっていた」とトムソンは指摘する。

他人指向的な人間の場合、まだ「所属すること」自体を重視しており、仲間集団の中で感じる不満を堪え忍んだ。しかし、ナルシストは、他者の犠牲になることを拒否し、集団を慎重に選択する。社会生活場面における対人関係は、自己を規定するものではなく、自己によって規定されるものであり、ナルシストは、自分の役割が社会的・制度的に強制されることを拒否し、自分で選択し、それを自分で定義するのである。

②社会的統合の可能性

トムソンは、一九五〇年代の他人指向の中にすでに芽生えていた「変易的アイデンティティ」と「役割の自己規定」が、一九七〇年代のナルシズムの中で開花する原因として、第二次世界大戦後、豊かさと変化の時代を当然のことと考えるようになった点、また、リースマンが内部指向から他人指向への変化を引き起こすと考えた職場における柔軟性の要求が、一九五〇年代以降もいっそう強まり、変化に適応でき革新的

で無秩序や曖昧さにも平然と対応できる者が求められている点を上げている。

家族を見た場合、そこでも柔軟性を誘発する変化が起きている。性役割の変化と高い離婚・再婚率の影響から、「家族のメンバーは制度としての家族に強く規定されない自分の役割とアイデンティティの再定義をしばしば要求されている」¹⁹⁾。

アメリカ社会はより複雑化・多様化し、社会的統合はますます困難になってきている。しかし、このような状況の中では、「変易的アイデンティティ」という新しいアイデンティティは、社会的統合を促すかもしれないとトムソンは言う。例えば家族内の役割を考えてみると、「自分の子供や年老いた両親のために自分を犠牲にするかどうかは、個人的な選択事項になっている。もし自分を犠牲にすることがあるとしても、それは愛情や役に立ちたいという願望や人生をより意味のあるものにするためにそうするのであり、義務や親としてのあるいは子としての役割を果たすという強制からではない」とトムソンは指摘する。制度的役割に基づく社会的統合から自己によって規定された役割に基づく社会的統合へと移行する可能性があると言うのである。

当時、批評家の多くが批判した一九五〇年代の社会的性格も実は進行する社会の変化にうまく適応するものであったとするなら、「他人指向的な人間の同調性は、むしろ豊富で高度なパーソナリティを目指した自己と対人関係への関心の高

まりを示したものの」と言えるかもしれない。同様に、「ナルシズムを変易的アイデンティティと役割の自己規定の発展を意味すると考えるならば、Me世代は新しいより有害な自分本位ではなく、むしろより複雑な社会的統合の始まりである」とトムソンは主張する。この観点から考えると、「ナルシストの自己陶醉は、現代社会が要求する役割に応えるためのより慎重な自分だけのパターンを形成する企て」と見なすことができ、「社会的制度からの撤退と公私の区別の不明確化は、一九五〇年代の特徴である。『偽りの統合』から離れ、より大きな個人的なかわり合いに基づく社会参加に向かう動きと見ることが出来る」と言う。

「新しいアイデンティティと社会的結合を正確に描くことは難しいが、このアイデンティティは、他人指向とMe世代という『同調性と個人主義』という両極の間を自由に動き回ることによってこの両極性を乗り越えようとしている」とトムソンは主張する。

三、「他人指向」から「自己イメージ指向」へ

一九五〇年代の他人指向から一九七〇年代のナルシズムへの変化を「変易的アイデンティティ」と「役割の自己規定」の発展ととらえ、さらにそれを社会の変化への適応の仕方の変化と考えるトムソンの見解は、示唆に富んだものであると考えられる。そこで、次に「変易的アイデンティティ」と「役

割の自己規定」に特徴づけられる七〇年代のナルシズムへ至る社会的性格の変化と前述した消費社会の変容と関連させて考えてみたい。

まず初めに、リースマンの社会的性格の三類型と消費社会の三段階の関係を見ると、伝統的価値規範から自由になり自分のジャイロスコープを頼りに生きようとした内部指向は、消費される物が機能において固有の価値・象徴の意味から自由になった「機能的段階」に対応し、仲間集団の動向をリーダーで敏感に察知する他人指向は、消費される物がその機能から離脱し、所有される物として意味を与えられ、シリーズの中の一つの関係項になった「非機能的段階」に対応する。

リーダーは、仲間の所有する物の体系を察知することによって仲間集団の中で自分の位置を再確認するものである。ジャイロスコープを持つ「内部指向型」が「機能的段階」、リーダーを持つ「他人指向型」が「非機能的段階」に対応するならば、リースマンの図式をさらに延長し、「メタ機能Ⅱ非機能的段階」に突入した消費社会に対応する社会的性格を設定する必要があることになる。ラッシュの指摘するナルシズム文化とは、「メタ機能Ⅱ非機能的段階」の消費社会における文化を指していると考えられ、現代の社会的性格とは、ナルシズム文化に彩られた消費社会に適応するためのものだということになる。

また、ラッシュの「無限に順応でき、とりかえもきくアイ

デンティティ」という考え方は、リフトンの「プロテウスの人間」を連想させる。リフトンは、変幻自在の「プロテウスの人間」が生まれてくる原因の一つとしてマス・メディアの役割を強調した¹¹。マスコミを通じて作り出されるイメージの洪水によって、人生の全ての領域は攪乱され、人々は個人としてのはっきりとした境界を保持できなくなる。「プロテウスの人間」は、内面的葛藤を感じることなく、自己の価値観、思想、イデオロギーを容易に変更する。リフトンの「プロテウスの人間」に対して、ラッシュの描く現代人を「ナルシスの人間」と呼ぶなら、この「ナルシスの人間」もストラテジーとして変幻自在のプロテウスのスタイルをとる。しかし、彼には守るべき自己イメージがある。ただ、そのアウトラインははっきりしていない。

トムソンは、前述したように他人指向からナルシズムという社会的性格の変化を「変易的アイデンティティ」と「役割の自己規定」の発展という形で論じたが、この社会的性格の変化は、「非機能的段階」から「メタ機能Ⅱ非機能的段階」へという消費社会の変容に伴って出現したものであり、消費者が自らの全能感と自己イメージを肥大させていく過程でもある。ナルシズムとは、ラッシュの言うように精神的サバイバルであり、ナルシシストは様々なサバイバル・ストラテジーによって最後の砦であるミニマルセルフを防御しようとしている。「変易的アイデンティティ」とはナルシシストに

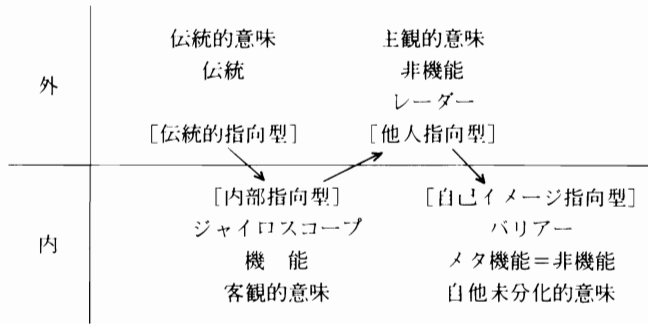
とっての有効な生き残り戦略の一つなのであり、「役割の自己規定」とは肥大した自己イメージを基準に自己の役割を規定することなのである。表面的には「無限に順応でき、とりかえも大きくアイデンティティ」に見えるが、その背後には不変の肥大した全能感と自己イメージが存在しているのである。そこで、本稿では、消費社会の変容によって新たに生まれた社会的性格を、ホードリヤール、ラッシュュ、トムソンの視点を手がかりにナルシスティックな「自己イメージ指向型」と呼びたい。

「他人指向型」のベクトルが外を向いていたのに対して、「自己イメージ指向型」のベクトルはもう一度内側に向く。リースマンの「内部指向型」がジャイロスコープを持ち、「他人指向型」がリーダーを持っていたのに対し、「自己イメージ指向型」はバリアーを身につけている。ナルシズム文化に彩られた「自己イメージ指向社会」において、人々は自分の回りに防御バリアー、物理的・心理的バリアーを張り巡らすことによって、他者との間の距離をとる。彼らは、母親から息詰まるほどの世話を受けながら、高度消費社会の中で成長することによって、全能感と自己イメージを肥大させ、同時に他者との深い感情的つながりによって厄介な人間関係のしがらみに巻き込まれ他者の犠牲になる危険性と、その全能感を傷つけられる危険性を教え込まれる。彼らは、「他人指向社会」のなかで近づき過ぎてしまった他者との間に距離を

とることによって他者性を排除しつつ、同時に「自分で自分を個性化」しようとするのである。彼らにとって一番うつつうしいのが「他人指向型人間」である。何故なら、彼らは平気でバリアーを突き破って気になる部分に触れてくるからである。「自己イメージ指向型人間」は、自らの全能感と自己イメージを肥大させつつ、他方でそれが他者に認められ、賞賛されたいというアンビバレントな欲求を抱いている。その結果、様々なメディアを多用して、他者とのコミットメントを試みることになる。

「自己イメージ指向型人間」と「他人指向型人間」とでは、その友人関係の内容が異なる。「他人指向型人間」は、仲間の動向に敏感に反応するが、ナルシスティックな「自己イメージ指向型人間」の場合は、仲間とは友人としての演技をうまくしてくる存在でしかない。いつでも自分の観客になってくれたり、よい共演者になってくれなければならないのである。自分は周りからの真の喝采を求めている。しかし、観客である仲間は、喝采を送るふりをしているだけなのかもしれない。それを確かめることはできない。肥大した全能感と自己イメージを演技によって演出しても、仲間も観客を演じているだけだとしたら、他者からの視線はいつまでたっても自分には向かない。他者の視線を気にしていながら、結局はみんな誰からも見られていないというパラドクスをはらんでいるのである。

図1 社会的性格の変容



リースマンが指摘したように、「他人指向社会」においては友人も消費される。同じことは、「自己イメージ指向社会」についても言える。しかし、消費される友人の位相が異なる。ボードリヤールの消費される物の三類型は、友人についても当てはまるはずである。「他人指向社会」での友人の消費は

「非機能的体系」「自己イメージ指向社会」における友人の消費は「メタ機能≠非機能的な体系」の中で行われると考えられる。「内部指向社会」では各々が自分の目標を持ち他人の友として結ばれていた友人関係も、「他人指向社会」においてはあくまで主観的な意味を重視して選択され、自分の生き方の方向を決定する存在に変わっていく。それに対して、ナルシスティックな「自己イメージ指向社会」では、モードの論理によって選択される。友人も恋人もすべて「シミュラークル」ではない。オリジナルな意味を欠き、シニフェを欠き、単なる差異の戯れと化した友人や恋人というシニファンではない。「自分で自分を個性化する」ためのマークアップでしかないのである。

四 現代日本の青少年のナルシズム文化

中野収は、現代日本の若者について、「カプセル人間」や「メディア・サイボーグ」という言葉で、ラッシュと同様にナルシスティックな傾向を指摘している。いわゆる「イデオロギーの終焉」から価値の多様化・多元化が進むにつれ、普遍的な価値を共有しない個別主義によって、人と人の関係は疎遠になり、モノやメディアとの付き合いが増えていった。そこで中野は、その孤絶した小宇宙の中で自足し、自らを見つめている若者を「カプセル人間」と呼んだのである。彼らは、他者との関わりを最小限にし、関わる時は様々なメディア

アを遮断物として間において、心理的・物理的に間隔をとろうとする。メディアとの関係は、接触というよりも融合であり、このメディアと融合した若者を中野は「メディア・サイボーグ」と呼んだ³⁹。中野は、「カプセル人間」を他人指向型人間の後に発生した社会的性格であり、「孤独な群衆」の末裔として位置づけている⁴⁰。

我々は、日本の青少年のナルシズムについて調べるために、一九八七年十月に大阪の千里ニュータウン内のH中学校調査を実施した。この調査結果については既に別の所で述べているので、ここでは二点に絞って述べるにとどめたい⁴¹。

まず、第一点は他者との距離についてである。他者との関わりは、相手がたとえ友たちでも異常接近は危険を招く恐れがある。それ故に、他者との距離を保たねばならない。ラッシュは、サイバール・ストラテジーの一つとして「ユーモア」と「自己のパロディ化」を上げていたが、調査結果にも同様のことが見られた。「自分の性格で長所たと思つてるところはどんなことですか。」という問いに最も多く選ばれたものは「明るさ」(二九・三%)であった⁴²。また、「大切な自分のイメージ」はどんなものか」という問いに最も多く選ばれたものは「おもしろさ」(二五・五%)であり、「どんな生徒が人気があるか」という問いには「ユーモアのある人」という回答が最も多かった(三九・八%)⁴³。この「明るさ」「おもしろさ」「ユーモア」は、周囲の注目を集めつつ、同

時に責任を回避し批判を和らげることが出来るものである。それらは、攻撃される危険性のある「まじめ」を捨てて身につけたバリアーであり、ストラテジーであると考えられる。

また、「理想の母」「理想の父」「理想の結婚相手」「理想の教師」の要素についての問いに共通して多かった回答は「やさしさ」であった⁴⁴。彼らが上げる「やさしさ」とは、「あなたには攻撃は加えません」というサインであり、相手との衝突を避けるために有効なストラテジーである。それを普段から相手に求めることによって、ニヤミスを回避しようとしているのである。

第二点は、言葉や態度でバリアーを張り巡らしてもどうにもならない、身体に向けられる他者からの視線である。中・高校生の「朝シャン」(朝のシャンプー)については、最近よく取り上げられているが、今回の調査でも、「したことがある」という生徒は、二・三年生の女子で約五割、男子でも二年生で約三割、三年生では約四割あった⁴⁵。シャンプーの香りの残る髪は、本人が快適である以上に他者からの攻撃を回避する手段なのである。修学旅行で入浴の際に水着を着て入浴する生徒が多いと聞かす、普段の学校生活の中でも、非常に多くの生徒が、学生ズボンやスカートの下に体育の短パンやブルマーをはいている。男子で約六割(三年では八割)、女子では九割近くもいる⁴⁶。

現代中学生は、生々しい自己を他者に見られる嫌悪感・不

快感を回避するため、「風呂での水着」「短パン・ブルマー」「朝シャン」というバリアーで他者との距離をとり、あらわになりそうな自己を防御している。そして、「明るさ」「やさしさ」もこの漂白したボディ・スーツにつけたワンポイントの商標であり、彼らにとっては大切な記号であり、同時に「防衛手段なのである。明るさ」「おもしろさ」「ユーモア」「やさしさ」は、自分にとって有力なサブイタル・ストラテジーであるだけでなく、それらは他者に対しても求められる。なぜなら、ナルシスティックな「自己イメージ指向型人間」は、他者性を排除しようとしてはいるものの、肥大した全能感を他者を通して確認しなければならず、そのための他者とのコミュニケーションも、一定の距離をとってこそ成立するものだからである。

NTTの伝言ダイヤルは、ナルシスティックな「自己イメージ指向型人間」に人気を呼んだ。伝言ダイヤルの利用者を分析した浅羽通明は、「初対面の生身が放つ圧倒的な他者性に直面するプレッシャー」⁴³に耐えられないティーンエイジャー達は、伝言ナビするため「技術と才能は生身の自分からはらんでいる膨大な不格好と無内容を、記号的情報の背後に隠しきることに注がれる。それには多少の努力はようするものの、他者と他者とが生で直面するプレッシャーに耐える技術よりは、はるかに簡単なものである。」⁴⁴と言う。

「相手を深く理解すること」とか「相手を思いやること」

は、お互いが自分の体に薄い膜を張り付け、それを体の一部のように感じる感性を共有することなのである。ポードリヤールが指摘したように、「裸体に透明な膜をはりつける線作」をほどこした裸体のほうが「本当の裸体らしい」と同じことである⁴⁵。消費社会の中で肥大した自己イメージ・全能感、この薄い透明な膜によって保護されて初めて満たされるのである。

五 「自己イメージ指向社会」における同調様式の四類型

しかしながら、「自己イメージ指向社会」だからと言って、全ての人が一様にナルシスティックな「自己イメージ指向型人間」であるというわけではない。リースマンは、どの時代にも見られる社会への同調様式として、「適応型」「アノミー型」「自律型」の三つの理念型を提出している⁴⁶。リースマンのこの三類型は、「自己イメージ指向社会」にも当てはまるはずである。「適応型」とは、その文化のために生まれてきたようなタイプである。自分がジャイロスコープやレーダーを持っていることとする意識していない。リースマンの場合、「アノミー型」とは不適応型とほとんど同じ意味である。不適応という消費的な意味を含んでしまうが、場合によっては「アノミー型」に高い評価が与えられる場合もありうることから、彼は不適応という言葉を使用していない。例えば、

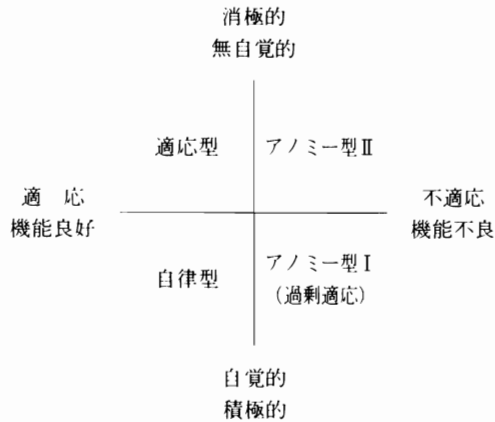
古い時代の適応型人間は「アノミー型」になる。内部指向型人間が、他人指向型社会に適応できなかったように、「自己イメージ指向社会」では他人指向型人間は「アノミー型」になる。また、同調過剰、適応過剰な人間も適応できない。たとえナルシスティックな「自己イメージ指向社会」でも、過剰にナルシスティックな人間は「アノミー型」になる。

リースマンの「アノミー型」の中身は、一様ではない。特にこの同調過剰、適応過剰の人間は、古い社会的性格を身につけたままの他の「アノミー型」とはかなり質を異にしたものである。そこで、リースマンの三類型を参考にしながら、彼の「アノミー型」の内の同調過剰・適応過剰の人間を独立させて四類型を設定してみる(図2)。横軸は適応・不適応を分ける軸であり、バリアーがうまく機能しているか否かを規定する軸である。縦軸は自分のバリアーを自覚しているか否か、積極的に線作しようとしているか否かを分ける軸である。適応型の場合、バリアーはうまく機能しているが、自分がバリアーを張っていることに気づいていない。アノミー型Ⅱの場合は、さらに自分のバリアーがうまく機能していないことにも気づいていない。あるいは、バリアーを張ろうとしても、心理的バリアーがどういふものか理解できないためうまく張れないのである。それに対して、自律型とアノミー型Ⅰは、自分の周りにバリアーを積極的に張り巡らそうとする。自律型はそれを自由に線作。バリアーの電圧を上げたり下げ

たり自由に線作する。アノミー型Ⅰは、過剰同調・過剰適応にあたる。バリアーの電圧を常に最大にしておかなければ気がすまないタイプであり、過剰にナルシスティックな人間である。

我々は、調査結果を林の数量化三類にかけ分析を試みた⁴³。その結果、上述の二軸に非常に近い有効な二軸を析出し、四類型を作成している。そこに、さらに他の幾つかの質問項目をクロスさせてみた。その一部をまとめたものが表1である。これからもわかるように適応型は、現状に対して積極的な肯定も否定もなく、過剰なストラテジーをとっていない。自律型になると現状を積極的に肯定している。これに対してアノミー型は、明らかに現状に対して否定的であり、逸脱願望も強い。アノミー型Ⅰは、クラブに「燃えている」が、アノミー型Ⅱは、消極的で、授業態度も良くない。友人関係を見ても、クラス内の嫌いな人をアノミー型Ⅱが無視するのに対して、アノミー型Ⅰは攻撃する。また、「いじめっ子」「いじめられっ子」の両方ともがアノミー型Ⅰであり、今の友人と一生つき合いたいという自律型に対して、アノミー型Ⅰは一生つき合うつもりなどない。このような四類型の違いが明確に現れるのが、自己の五段階評価である。適応型は三、自律型は四、アノミー型Ⅰ(過剰適応型)は五、アノミー型Ⅱは一・二となる。また、「短パン」はアノミー型Ⅰ、「ブルマー」は適応型となる。

図2 同調様式の種類



次に、この四類型をもとに、最近起こった「両親祖母刺殺事件」「エアー・ガン通り魔事件」など幾つかの事件の中から、過剰とも言える報道合戦が繰り広げられた「連続幼女誘拐殺人事件」を取り上げてみた。ただこの事件は、現在裁判以前の段階にあり、「事実関係」はマスコミ報道に依拠するほかない。(以下、容疑者の青年をM君とする)

報道された事実から浮かび上がってくるM君像は、必要以上
に他者の目を気にしつつ自分一人の世界に閉じ込め、自らの全能感・自己イメージを過剰に肥大させていく、過剰に

ナルシスティックなアノミー型Ⅰ(過剰同調)に極めて近い自己イメージが肥大化するほど、日常の世界はますます危険に満ちたものになっていく。また、ナルシスティックな人間は、自らの全能感・自己イメージを肥大させつつ、他方でそれを他者によって認めてもらおうとするアンビバレントな欲求を抱いている。M君は、自分が傷つかず、かつ肥大した自己イメージ・全能感を満たしてくれる相手が必要としていた。それが幼女であったのだろう。

報道された事実をこの様な視点から考えると、今回の事件は三つの場面から成立しているように思われる。一つ目は、M君が、幼女と話しをしたり写真を撮ったりする場面である。彼は、他の友だちと接している時には感じられない充足感を感じ、同時に自分の肥大した自己イメージを満足させることができたはずである。しかし、彼は、そんな幼女の中にも自分のバリアーを平気で破壊してしまう無神経な「現実の世界」の他者の臭いを感じとってしまった。そのため、彼は、幼女を自分一人の世界に留めようとして殺害し、写真やビデオの世界の中に幼女を移しかえたのだろう。

二つ目は、殺害した幼女をビデオにおさめたモニターを通じて幼女と接する場面である。彼はバリアーの内側で記録された幼女の姿をビデオのモニターに映し出す。TVドラマの方がリアルで、現実が「……のようなもの」となっている現代社会において、幼女の死体をビデオのモニターで見た時の

表1

	適応型	自律型	アノミー型	
			I	II
千里ニュータウンは快適な街か	そういう気もする	快適な街だ	違うような気がする 全く違う	
学校で学生ズボンの下に短パンをはくか(男)		はいたこと無	毎日はいく よくはいく 減多はかない	
学校でスカートの下にブルマをはくか(女)	毎日はいく よくはいく		減多はかない はいたこと無	
友人とどちらが偉いか	分からない		自分・友達	
友人と将来どちら偉い	分からない		自分・友達	
友人は理解してくれる	分からない	よく理解	よく理解せず	
今の友達と一生付き合いたいと思うか	余り思わない	一生付き合いたい	付き合いたいと思わない	
今の友達との付き合いをやめたいか	余り思わない	思わない	いつも思う 時々思う	
他の友達とつきあいたい	時々思う 余り思わない		いつも思う 思わない	
クラスに嫌いな人がいたらどんな態度するか	陰口・態度に出さない	理解しようと努力する	攻撃	無視
現在、いじめているか	いじめてない		いじめている	
現在いじめられているか	いじめられず		いじめられる	
いじめられない為にはどうすればよいか	マイペースで過ごす	他人に負けないものを持つ 他人と違うことをしなうにする	目立つようにする 目立たないようにする その他	
クラブへの情熱度は	普通	楽しみにしている	燃えている	少しやる気がない 全くやる気無
学校での授業態度		大変良い だいたいよい		余り良くない 悪い
やってみたいこと、やったことのあるもの (以下自己評価)			飲酒・喫煙・シンナー・万引・学校の施設破壊・服装違反・家出等	髪型違反・オートバイ・口紅・マニキュア・学校さぼり・パーマ
体力	3	4	5	1・2
忍耐力	3	4	5	1・2
創意工夫	3	4	5	1・2
他の人を思いやる心	3	4	5	1・2
他の人との協調性	3	4	5	1・2
学力〔学校での成績〕	3・4・5			1・2

方を彼がリアルに感じたということは十分に考えられる。

三つ目は、幼女の骨片入りダンボール箱を自宅に送りつけた後、M君自身が「犯行声明文」「告白文」によって今田勇子の名でマスコミに登場する場面である。彼は、殺害した少女と今田勇子との物語を創作し、それを「犯行声明文」という形でマスコミに公表する。彼は、「犯行声明文」の内容の矛盾点をマスコミに指摘されると、それに反論する形で「告白文」を新聞社に送りつけた。物語の語り手という形で自己の役割を自己規定することができたこの第三の場面で、彼は初めて自分のバリアーを有効に利用しながら肥大した自己の全能感と自己イメージを満足させることが出来たのだと思われる。

さらに「連続幼女誘拐殺人事件」が「自己イメージ指向社会」との関連で注目されるのは、マスコミ報道によって描かれたM君像に共感を示す若者達が存在していることにある⁴⁰。なぜなら、彼らの存在は、社会への新しい適応様式・同調様式が生まれていることを示唆しているからである。

むすびにかえて

以上、トムソン、リースマン、ボードリヤール、ラッシュュラの所論を手がかりに、現代社会における社会的性格を消費社会の変容との関連から取り上げた。そして、ナルシスティックな「自己イメージ指向」を現代の高度消費社会に適応す

る新たな社会的性格と位置づけた。それは、消費社会の中で肥大した全能感・自己イメージと、トムソンが指摘するような「変易的アイデンティティ」「役割の自己規定」に特徴づけられる。

ナルシスティックな「自己イメージ指向社会」だからといって一様にナルシスティックな「自己イメージ指向型人間」なのではなく、それぞれ異なったストラテジーをとっている。本稿では、「適応型」「自律型」「アノミー型I」（過剰適応）「アノミー型II」の四類型を設定し考察してきた。この四類型は、ナルシスティックな「自己イメージ指向社会」への同調様式の多様性の一端を明らかにする試みである。

また、「連続幼女誘拐殺人事件」は、「自己イメージ指向社会」を象徴する事件であり、このようなナルシスティックな文化に彩られた「自己イメージ指向社会」を自律的に生きるとはどういうことなのかをさらに明確にしていくことが、今後の課題である。

注① David Riesman, *The Lonely Crowd*, Yale University Press, 1950. 加藤秀俊訳『孤独な群衆』（邦訳は一九六一年簡約版）一九六四年、参照。

② ここで言う消費社会は、アメリカと日本の消費社会を念頭においている。

③ Jean Baudrillard, *Le système des objets*, Éditions

Gallimard, 1968, 宇波彰訳『物の体系』法政大学出版局一九八〇年、参照。

- ④ D. Riesman, op. cit., 1950, p. 47, 前掲訳書「三八頁参照。
- ⑤ Jean Baudrillard, *La Societe de consommation: ses mythes, ses structures* (Perlace de J.P. Mayer), Gallimard, 1970, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店・一九七九年、参照。
- ⑥ *Ibid.*, 同右、参照。
- ⑦ Christopher Lasch, *The Culture of Narcissism*, New York: Norton, 1979, 石川弘義訳『ナルシズムの時代』ナシメ社・一九八四年、*The Minimal Self*, New York: Norton, 1984, 石川弘義・山根三沙・岩佐祥子訳『ミニマルセルフ』時事通信社・一九八六年、参照。
- ⑧ C. Lasch, op. cit., 1984, p. 33, 前掲訳書「一三三頁。
- ⑨ *Ibid.*, p. 15, 同右「一頁。
- ⑩ *Ibid.*, p. 19, 同右「一頁。
- ⑪ Irene Taviss Thomson, *From Other—Direction to the Me Decade: The Development of Fluid Identities and Personal Role Definitions*, SOCIOLOGICAL INQUIRY, Volume 55, Number 3, Summer 1985.
- ⑫ Tom Wolfe, *The me decade and the third great awakening, in Mauve Gloves and Madmen, Clutter and Vine*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1976.
- ⑬ C. Lasch, op. cit., 1979, 前掲訳書。
- ⑭ Ralph H. Turner, *The themes of contemporary social movements*, British Journal of sociology 20, 1969; *The real*

self: From institution to impulse, American Journal of Sociology 81, 1976.

- ⑮ Louis A. Zurcher, *The mutable self: An adaptation to accelerated socio-cultural change, et al.* 3, 1972; *The Mutable Self*, Beverly Hills, Calif. Sage Publications.
- ⑯ I. T. Thomson, op. cit., p. 280.
- ⑰ *Ibid.*, p. 281.
- ⑱ *Ibid.*, p. 286.
- ⑲ *Ibid.*, p. 286.
- ⑳ *Ibid.*, p. 286.
- ㉑ *Ibid.*, p. 286.
- ㉒ *Ibid.*, p. 287.
- ㉓ *Ibid.*, p. 287.
- ㉔ *Ibid.*, p. 287.
- ㉕ Robert J. Lifton, *Boundaries: Psychological man in revolution*, Deborah Rogers, 1970, 外林大作訳『誰が生き残るか—プロテウス人間—』誠信書房・一九七一年、参照。
- ㉖ 中野収『ナルシスの現在—自愛と自虐の倫理—』時事通信社・一九八四年、等を参照。
- ㉗ 同右・一九・一九三頁、参照。
- ㉘ 中野収『現代史のなかの若者』三省堂・一九八七年、一四一・一四二頁、一四三・一四四頁、参照。
- ㉙ 中野・前掲書・一九八四年・一八九頁、参照。現代日本のナルシズムについては、小此木啓吾、中西信男などによっても論じられているが、そこには消費社会という観点

が弱い、或は欠落している。

⑩ 本調査は、千里ニュータウン内の中学校で実施した生徒の生活実態および意識全般にわたる多目的調査であり、校内の各委員会・指導部から選出された先生方によって構成される調査委員会と我々の研究グループとの共同調査という形で実施された。教育現場への影響を考慮して学校名を明記することは差し控えH中学校とする。本調査は、九八七年度H中学校に在籍する生徒全員を対象にした悉皆調査であり、調査期間は、一九八七年一〇月三〇日・三限日と三十一日三・四限日である。サンプル数は、一八九、調査方法は質問紙を用いた集合調査法(教室に於いて)で、回収率は九九・三%であった。なお、調査表は、生徒の生活・意識全般についての四〇の一の質問項目によって構成されている。

⑪ 報告書は、共同執筆の形で一九八八年三月に中学校名で刊行している。また、我々の研究グループだけによる調査報告は、関西大学大学院『人間科学』第三二号(一九八九年三月)誌上で行っている。詳しくは、拙稿『小特集』消費社会と青少年のナルシズム」を参照のこと。

⑫ 質問文と選択枝、回答率は以下の通り。「あなたが自分の性格で長所だと思っているところはどんなことですか。(一つ選べ)」明るい(二九・三%)、やさしい(一三・五%)、正直(一六・二%)、根気がある(五・〇%)、礼儀正しい(三・六%)、その他(一・八%)、ない(八・二%)、わからない(三〇・三%)、NA(二・二%)。

⑬ 質問文と選択枝、回答率は以下の通り。「あなたにとって『大切な自分のイメージ』は次の内のどれですか。(一つ選

べ) おもしろさ(二五・五%)、健康的(二五・一%)、誠実さ(一七・八%)、清潔さ(一・八%)、かわいさ(四・六%)、たくましさ(四・二%)、しとやかさ(二・三%)、美しさ(一・二%)、NA(六・九%)。

⑭ 質問文と選択枝、回答率は以下の通り。「あなたのクラスではどんな生徒が人気がありますか。(一つ選べ)」。ユーモアのある人(二九・八%)、思いやりのある人(三・三%)、スポーツのできる人(四・八%)、勉強ができる人(二・七%)、ちょっと不良っぽい人(二・二%)、先生に反抗できる人(一・六%)、その他(二・八%)、わからない(二・〇%)、NA(一・八%)。

⑮ この四問の質問文と選択枝、それぞれの回答率は以下の通り。「あなたにとって理想のお父さんは次の内のどれですか。あてはまるものを二つ選びなさい。」やさしい(五九・七%)、よく話を聞いてくれる(四六・七%)、母親と仲がよい(三三・八%)、ことを言わない(一七・七%)、知識が豊富(二五・一%)、家事をよくする(一八・八%)、スタイル服装のセンスがよい(一四・五%)、一緒に遊んでくれる(一三・〇%)、きびしい(一・九%)、仕事をしているがいにしてている(九・〇%)、趣味が多い(八・七%)。

「あなたにとって理想のお母さんは次の内のどれですか。あてはまるものを二つ選びなさい。」やさしい(五一・二%)、よく話を聞いてくれる(三四・四%)、父親と仲がよい(二五・二%)、ことを言わない(一〇・六%)、家事をよくする(一七・四%)、スタイル服装のセンスがよい(二〇・九%)、知識が豊富(九・七%)、きびしい(四・三%)、趣

味が多い(三・六%)、一緒に遊んでくれる(二・九%)、仕事を生きがいにしてている(一・九%)。

「将来、結婚する相手として理想の人を次の中から一つ選びなさい。」思いやりがあつてやさしい(五三・七%)、健康である(一一・七%)、考え方が一致している(八・四%)、料理が上手(四・〇%)、安定した仕事についている(三・二%)、家事ができる(二・三%)、かっこいい(二・二%)、収入が高い(二・〇%)、親が金持ちである(一・四%)、趣味が同じ(一・二%)、高い学歴(〇・四五%)、結婚したくない(六・二%)、NA(三・二%)。

「あなたにとって理想の教師は次の内どれですか。あてはまるものを二つ選びなさい。」よく話を聞いてくれる(五〇・三%)、やさしい(四二・二%)、知識が豊富(二八・三%)、(二)ことを言わない(一九・五%)、仕事を生きがいにしてている(九・一%)、きびしい(九・一%)、一緒に遊んでくれる(五・一%)、スタイル服装のセンスがよい(三・七%)、趣味が多い(三・二%)。

③⑥ 野田正彰『漂白される子ども』情報センター出版局、一九八八年。大塚英志『少女民族学』光文社、一九八九年。

藤村厚夫・玉木明・米沢慧『子ども―場所・消費・イメージ』新曜社、一九八九年、等。

③⑦ 「登校前にシャンプーをしますか。(二)つ選べ」毎日する(二・九%)、よくする(四・五%)、たまにする(二六・九%)、しない(六五・二%)。本文であげた「したことがある」は「しない」以外を合計した値である。

③⑧ 「あなたは、ふだん学生ズボンの下に体育の短パンをは

いていますか。(男子のみ)毎日はいく(二二・三%)、よくはいく(三九・六%)、めったにはかない(二九・九%)、はいたことがない(五・三%)、NA(二・九%)。

「あなたは、ふだん学生スカートの下に体育のブルマをはいていますか。(女子のみ)毎日はいく(六二・二%)、よくはいく(二五・三%)、めったにはかない(一〇・五%)、はいたことがない(〇・九%)、NA(一・〇%)。本文で「はいている」というのは「毎日はいく」と「よくはいく」を合わせた値である。

③⑨ 櫻村正則編著『伝言ダイヤル』の魔力―電話狂時代をレポートする!』JICC出版局、一九八九年、三三三頁。

④⑩ 同右、三三三頁。

④⑪ Jean Baudrillard, *L'échange symbolique et la mort*, Gallimard, 1975, 今村仁司・塚原史訳『象徴交換と死』筑摩書房、一九八二年、参照。

④⑫ D. Riesman, *op. city*, 1950, 前掲訳書、参照。

④⑬ 使用した質問項目は、学校生活、授業、成績、教師関係、友人関係、「いじめ」、危機感に関する二五項目である。尚、相関係数は、軸〇・三六三九四、二軸〇・三二九七二であった。詳しくは、拙稿(富田和広)「現代青少年のナルシシズム―関西大学大学院『人間科学』三二号(一九八九年)を参照のこと。

④⑭ 都市のフォークロアの会編『少女連続殺人事件を読む―全資料』宮崎勤はどう語られたか?』JICC出版局(一九八九年)には、三二二部の新聞と三九冊の雑誌に登場した一九人の識者のコメントが掲載されている。

④5 この事件は、一九八八年八月から八九年六月にかけて発生した。わずか一年足らずの間に、四人の幼女が続けて行方不明になり、その内の一人の幼女の骨片がダンボール箱に詰められ、被害者宅に届けられた。そして、被害者宅と新聞社に今田勇子の名で犯行声明文と告白文が送りつけられた。八九年七月三日、小学生の姉妹に近づき裸にして写真を撮っていた一人の青年が東京都八王子市内で逮捕された。その後の取調べの中で、彼は「連続幼女誘拐殺人」を自供した。彼の部屋に山と積まれた約六千本のビデオと大量のマンガ、そして、被害者の幼女の死体を映した写真・ビデオの発見と次々と伝えられる報道に、人々は大きな衝撃を受けた。

④6 例えば、M君は教室では目立たない存在だった（毎日新聞、一九八九年八月一日、朝刊、『無口で内気な』宮崎「もう一つの顔」）、右手に僅かな障害があったことを非常に気にしており、そのために女性に相手にしてもらえないと思ひ込んでいた（毎日新聞、一九八九年九月二〇日、朝刊、「連続幼女誘拐殺人：宮崎勤の心の世界」）、警察で夜人浴する際にタオルでしっかりと前を隠し絶対に見られないようにしていた（サンデー毎日、一九八九年九月七日号、「連続『幼女誘拐・殺人』—宮崎勤留置場の『素顔』と『肉声』—」、一六〇頁）、アニメマニア・ビデオマニア・数理バズルマニアであった（朝日新聞WEEKLY AREA、一九八九年八月二九日、「宮崎勤・複合偏愛の土壌」、一六九頁。週刊テレーミス、一九八九年八月三〇日、山下泰生「戦慄の新事実『連続幼女殺人事件』」、一四—一九頁。DAYS

JAPAN、一九八九年十月号、「宮崎勤からの挑戦状—数理バズル・暗号の異才」、一—九頁）、心を許す友だちが一人もいなかった（野中恭太郎「宮崎勤が迷い込んだ倒錯の森」、週刊文春、一九八九年九月七日号、二七頁）等。

④7 サンデー毎日、一九八九年九月三日号、「鮮烈アンケート!! 昭和三七年生まれの『私と宮崎』」。大塚英志「幼女連続殺人事件：メディアが想像するホラー的犯人像」朝日ジャーナル、九月一日号、一九八九年。週刊SPA!、一九八九年九月二〇日号、「緊急対談・中森明夫VS大塚英志」宮崎勤クンの部屋は僕らの世代の共通の部屋だ!」、参照。

(とみた ひでのり・神戸山手女子短期大学専任講師)
(はら きよはる・関西大学大学院)
(とみた かずひろ・関西大学人学院)